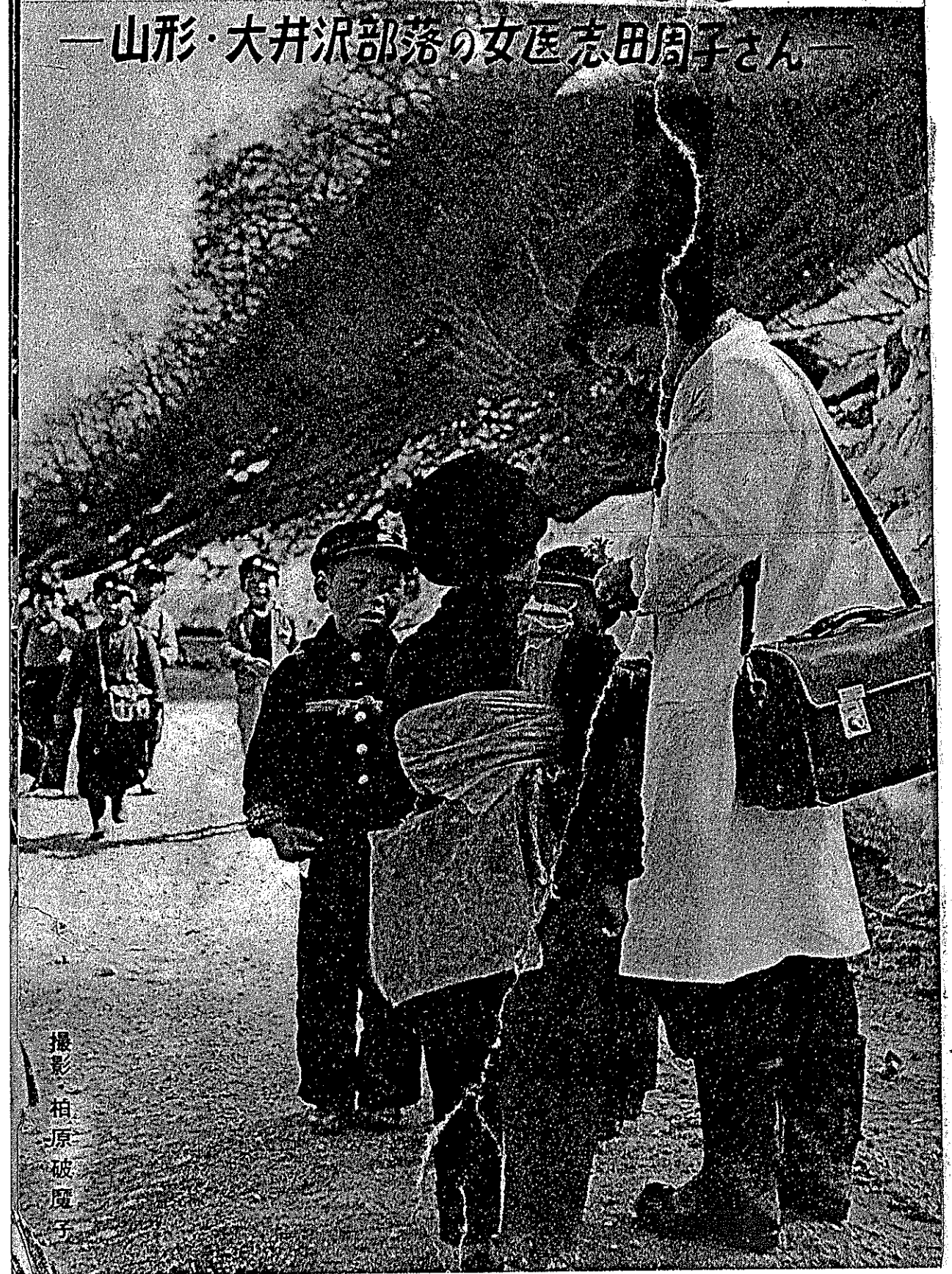
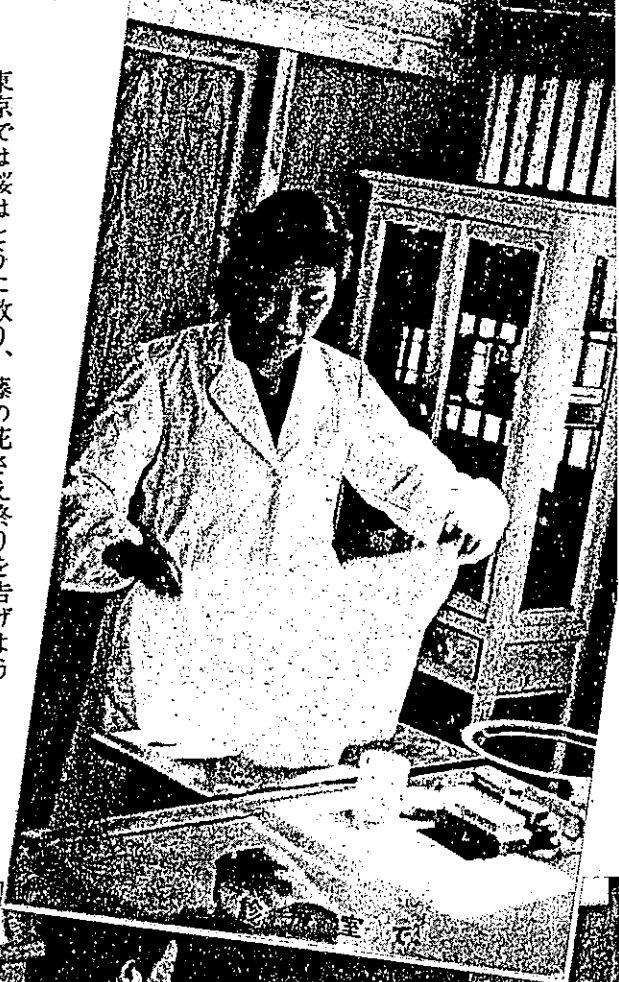


僻地に生きる

—山形・大井沢部落の女医志田周子さん—



撮影 柏原 破魔子



東京では桜はとうに散り、藤の花さえ終りを告げようという五月もなれば、山形市から左沢本線にのって西に入ると、あたりは一面の花盛りで、桜も梅も桃も杏も、むせかえるような春を謳って咲いていた。

しかし、その終点の間沢から、さらに六里の道を磐梯朝日国立公



「栄養の関係で、うすうす、全体の体格が標準に達しないんです」といふ時、志田さんの顔はかける。



「あの音が聞えるとし、じみ春が来た」と思うのよ。耐えて来た日々への思いをたぐり、うに、寒河江川岸にたつ志田さん。



園地帯に入り込んだ、ここ大井沢の部落には、今、やっと遅い春が訪れたところであった。白い雪をおいた山には山毛櫨の若芽がいつせいに吹き出し、音をたてて流れる雪どけ水のほとりには、路ノ苔が愛らしい姿を並べて五月の光を眩しがっている。

そして、長い半年もの冬籠りから抜け出た部落の人たちは、まだ雪のある田にあわてて苗代を作り、粃を蒔き、これから始まる忙がしい野良の仕事が、たつた今切つて落とされたところであった。しかし、北に月山、西南に朝日嶽、その間を寒河江川に沿って鰻のようにはひらけた大井沢部落は、全国の三分の一も生産する米どころの山形にありながら、その必要量の三分の一を他から買わねば生きて行けない寒村である。

「住診の帰りは、よく部落の」

志田周子さんは、ここに働いた一人の女医さんである。志田さんはもう二十年も前、理想家だった父の意志で二十六才の若い身そらを、新しくできた診療所の先生としてやって来た。自分が来なければ無医村であったこの村に、診療所が建たなかったのである。

初め三年だけの約束で、いやいやながら帰って来たのであったけれど、もう少しという時母に死なれ、十人兄弟の長女としての運命は、志田さんをこの村に据えつけてしまった。



ユリ子ちゃんと遊ぶ時が志田さんの一番幸せそうな時だ。



「去年から、やっと自転車にのれるようになったんです。ほんとに早くからやればよかったと思います……その自転車も、雪のない半年だけのものである。」

妹を嫁がせ、弟たちを大学に通わせながら、話相手とてない小さな村で、どんなに淋しい孤独に唇をかまねばならない日もあったろう。しかし、その間にも、志田さんは迎えが



患者に向う時、志田さんの目は輝き、若々しくなる。

れば吹雪の夜道を村はずれの家まで往診に出かけ、朝早く野良仕事の前に訪れる患者たちに注射をうって来た。二十年……。その間には若い夢をもだし難く、何べん広い世界にとび出そうと考えたか分らない。けれども、戦争、弟の戦死、父の死と次から次へと重なって、志田さんは、少女のように細くキャシャなその足で、夢という夢を踏みにじり、ついにこの地に骨を埋める決心をした。

町の役員をしたり校医をしたりはしているが、大した変化のない生活の中で、ともに歩む人生の伴侶を持たなかった志田さんを今、心から慰めてくれるものは、共稼ぎをする先生からあずかって育てているユリ子ちゃんである。そして、仕事の合間をみては弟たちやユリ子ちゃんのセーターを編んでいる時、志田さんは一番幸福そうである。